

5) 建造物琉球漆塗・琉球赤瓦製作施工 文化財保存技術（伝承）事業

幸喜 淳¹・佐久本 純¹・鶴田 大¹・嘉手苺なつき¹

キーワード：漆 赤瓦 瓦葺き 伝統技術 継承 選定保存技術

表-1 実施研修内容一覧(敬称略)

1. はじめに

本事業は、沖縄の伝統的建造物保存に必要な2つの分野、すなわち(1)伝統技法による漆塗装、(2)手作り瓦の製作・葺きについての技術者の養成を行う目的で、令和2年度より文化庁の助成を受けて開始した事業である。現在、琉球王国時代以来の伝統技法による漆塗装、手作り瓦の製作・葺きの技術は活用機会の少なさもあり、その継承が困難な状況となっている。そこで、現在では数少なくなった技術者や、漆・瓦に関わる専門的知見を持つ識者を講師に招いて技術伝承者の養成を行った。本年度以降も継続的な実施を予定しており、所定のカリキュラムを修めた者は今後、県内指定文化財建造物などの建造物漆塗装、瓦製作・葺きで活躍することが期待される。

2. 研修内容

過年度に引き続き、建造物琉球漆塗分野と、琉球赤瓦製作施工分野(古瓦製造と瓦葺き)の3分野で実施した。建造物琉球漆塗分野については今年度より新たに初級編の受講生を迎え、初級編と上級編の2コースに分け実習を行い、建造物琉球漆塗分野 初級編 4名・上級編 4名、琉球赤瓦製作施工分野は古瓦製造 4名、瓦葺き 4名がそれぞれ受講した。研修カリキュラムの計画は、建造物琉球漆塗分野では初級編 計69時間(講義8時間、実習61時間)・上級編 計28.5時間(講義2.5時間(開講式のみ)、実習26時間)、琉球赤瓦製作施工分野の古瓦製造は計66時間(講義11時間、実習55時間)、瓦葺きは計63時間(講義11時間、実習52時間)とした(表-1)。開講式は令和5年9月6日(木)に実施し、9月15日(金)には文化財保存・伝承に関する講義を、首里城歴史文化継承基金(首里城未来基金)事業と共同で実施した(表-1「※」)(写真-1)。

また文化庁とも協議を重ね、3分野の選定保存技術認定へ向けて、各分野の保存会の発足と、認定に必要な技術的特色の確認及び資料作成を本格化させた。

3分野共通講義		
※令和5年 9月6日(木)	文化財概論	文化庁 文化財調査官 結城啓司
	首里城正殿復元 工事概論	国営沖縄記念 公園事務所 首里出張所 所長 新垣博愛
※9月15日(金)	沖縄の建築と技術	公益社団法人 沖縄県建築士会 平良 啓
建造物琉球漆塗	専門講義【初級編】	
令和6年 3月4日(月)	漆器の文化財保 存修復について	琉球漆工芸舎 土井菜々子
建造物琉球漆塗	専門実習【初級編】	
10月2日(月)～ 令和6年 3月2日(土)	髹漆実習等 【正殿外壁用仕様】	株式会社 漆芸工房 諸見由則
建造物琉球漆塗	専門講義・専門実習【初級編】	
12月14日(木) 12月15日(金)	建造物彩色 【桐油彩色】	有限会社 彩色設計 小野村勇人
令和6年 2月6日(火) 2月7日(水)	建造物塗装 基礎	(公財)日光社寺 文化財保存会 佐藤則武
建造物琉球漆塗	県外研修【初級編】	
1月17日(水)～ 1月19日(金)	保存修理現場 見学 (東京都・栃木県)	(公財)日光社寺 文化財保存会 佐藤則武
建造物琉球漆塗	専門実習【上級編】	
2月26日(月)～ 2月29日(木)	建造物彩色 【桐油彩色】	有限会社 彩色設計 小野村勇人 久安敬三
3月9日(土) 3月16日(土)	髹漆実習等 【正殿内部用仕様】	株式会社 漆芸工房 諸見由則

¹ 琉球文化財研究室

琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き 共通講義		
※令和6年 1月23日(火)	琉球建築の 屋根構造と 瓦施工	公益社団法人 沖縄県建築士 会元会長 中本 清
	考古学から みた琉球赤 瓦の位置づ け	武蔵大学 石井龍太
3月8日(金)	瓦の材料・ 製作	沖縄県工業技 術センター 元所長 与座範 弘
	伝統瓦基礎	日本伝統瓦技 術保存会 長谷川成幸
琉球赤瓦製作施工 古瓦製造 専門実習		
令和5年 9月25日(月)～ 10月2日(月)	赤瓦伝統製 作技術 【前期】	沖縄県赤瓦事 業協同組合 八幡 昇
12月6日(水)～ 令和6年 1月19日(金)	赤瓦伝統製 作技術 【後期】	沖縄県赤瓦事 業協同組合 八幡 昇
琉球赤瓦製作施工 瓦葺き 専門実習		
令和5年 10月13日(金) 10月14日(土)	赤瓦葺き 基礎	沖縄県琉球赤 瓦漆喰施工協 同組合 田端 忠・ 大城幸祐・ 山城富嗣・ 城間盛行
11月17日(金) 11月18日(土)	赤瓦漆喰塗 基礎	
11月24日(金) 11月25日(土)	赤瓦漆喰塗 上級編	
琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き 県外研修		
11月11日(土)～ 11月13日(月)	保存修理 現場見学 (奈良県)	日本伝統瓦技 術保存会

3. 成果と課題

1) 建造物琉球漆塗 (講義・専門実習)

建造物琉球漆塗分野では、昨年度までの受講生を上級編とし、新たに初級編の受講生を迎え、初級編と上級編の2コースで実施した。

初級編では、土井菜々子氏による漆器修復についての専門講義を実施し、指定文化財漆工芸品の現状保存修理に関する原則が紹介され、修復前には十分な事前調査を行い、資料の状態から痛み具合や修理の必要性、資料の歴史等をしっかり把握した上で修理に取り掛かること、また、修理箇所が分かるように仕上げるなど保存修理の難しさについて学習した。

実習については、首里城正殿の外壁塗装仕様の工程手板の製作を実施した。また、小野村勇人氏(京都府)を講師に招き、桐油を用いた纏綿彩色等の技

法実習として建造物彩色の基礎を受講した。上級編では、建造物塗装の現場を見据え、首里城正殿の内壁塗装仕様の手板の製作や、首里城正殿などに使用される斗拱の立体模型(木型)への桐油彩色技法実習を実施した(写真-2)。

また佐藤則武氏(栃木県)を講師に招き、沖縄と県外の技法等の違いを念頭に日光における建造物漆塗装の技法を講義と実習で習得した。

県外研修では、初級編の受講生が参加し、沖縄県内の多くの漆職人が精製漆を仕入れている東京都の藤井漆工芸株式会社を訪問、伝統的な漆精製の技術を視察した。栃木県では佐藤氏が講師を務める(公財)日光社寺文化財保存会の研修場の視察、及び日光の二社一寺、特に東照宮の下神庫修理現場や輪王寺犬吠院の具体的な修復作業を視察した。また、先方のご厚意により(公財)日光社寺文化財保存会が主催する研修に1名派遣することができた。

2) 琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き (講義)

(公社)沖縄県建築士会元会長の中本清氏の講義では、沖縄の伝統的木造建築の構造と瓦葺き技法について写真と図面を用いた具体的な解説があった。特に沖縄の伝統的技法である谷筋(雨仕舞い)や換気孔(イーチミー・屋根裏等の換気のための空気穴)についても言及し、まさしく沖縄の気候に適した伝統的技法であるとの説明があった。石井龍太氏(武蔵大学)の講義では、世界中の多様な赤瓦文化が紹介され、近現代の琉球赤瓦については、直接には近世瓦にルーツを持ち、東アジア諸地域の瓦文化が独自に融合したものと規定し、16世紀以来の古瓦製造の技術は他地域で途絶えた諸技法を含んでおり、その継承には重要な意義があるとの解説があった。また沖縄県工業技術センター元所長の与座範弘氏の講義では、赤瓦の原料として用いられるクチャや石川赤土等の土に焦点を当て、化学的特質および収縮率(寸法)・吸水率・強度・呈色の知見が紹介された。また、首里城復元にかかわる瓦の最新情報も公開可能な範囲内で共有された。日本伝統瓦技術保存会の長谷川成幸氏による講義では、昨年に続き型紙を用いて描く瓦屋根の原寸図の書き方を実践方式で学んだ。本年度の内容は(1)軒先原寸図、(2)ミノコ[葺甲]原寸図、(3)唐破風原寸図の三種類につき、古瓦製造分野と瓦葺き分野の受講生がそれぞれ難易度別に実習した。特に瓦葺きの受講生は日々の現場を再認識できる場として積極的に取り組んだ。瓦屋根の原寸図は沖縄ではあまり見られないが、県外の伝統的な木造建築修理の現場では大工・棟梁とのやりとりで欠かせないものである。本講義には古瓦製造分野の実習講師・八幡昇氏(沖縄県赤瓦事業協同組合)と、瓦葺き分野の実習講師・田端忠氏(沖縄県琉球赤瓦漆喰施工協同組合)も参加したため、講師である長谷川氏との間で、本土の伝統建築の屋根組みと、琉球の伝統建造物の屋根組みの共通点や違いを議論しながらの講義となり、受講生もその内容を聴きながら、知見を深めることとなった。

県外研修においては、奈良県の日本瓦伝統技術保存会を訪問し、同会の造瓦製造研修場である山本瓦工場では工場見学や実際に焼成前の瓦を磨く（整える）作業を体験した。また、瓦施工の研修場でも前年度は原寸図の作成を中心に視察したが、今年度は各時代による屋根組み及び瓦の変遷について、架台や実際の古瓦を実見しながら説明を受け、質疑応答を行なった。各時代の共通部分・異なる部分について確認しつつ、琉球の瓦施工の特徴をより理解することができた。

また同会の配慮により大修理中（2020～2026年予定）の大徳寺本坊大方丈（京都府）の修理現場を、現場補佐の京都府技師・加藤吉絵氏の案内で視察し、現代工法を取り入れた伝統技法のありようを実感した。

3) 琉球赤瓦製作施工 古瓦製造（専門実習）

本年度で4年目となる古瓦製造の実習では、前年度までに基本的な製作方法は共有できたと考え、①胎土の繋ぎ目を突帯に合わせることや、②瓦の厚みについて均一性の精度を上げる等、各々の工程についてのさらに詳細なポイントに絞って技術の習得に努めた（写真-3）。また製作道具については、前々年度に本事業の為に製作し、修正を重ねてきたが、未だ負荷をかけるとロクロ回転にブレが生じていたため、桶巻道具の芯棒を新たに太い芯棒へ取り換えるなど大幅に調整・修正を加え、より安定した成形ができるよう改善した。今年度調整した瓦製作道具の規格については、一定の水準に達したと考え、初めて製作道具のCAD図面を作成した。CAD図面はこれまでの試行錯誤の重要な研究成果であり、かつ今後の瓦製作道具の追加製作・必要に応じての調整における基礎データとなる。

4) 琉球赤瓦製作施工 瓦葺き（専門実習）

瓦葺き分野の実習では、琉球建築の独特の様式でもあり、また技術的にも熟練を要する谷筋（雨仕舞い）と換気孔（イーチミー）を持つ実習架台（3m大）を施工した（写真-4）。また例年、野地は板張りであったが、今年度は竹編み（琉球竹編み）を取り入れ、より琉球特有の伝統建築に近づけた。また昨年度に続き、実習講師の計らいにより50年以上前の古瓦（手作り瓦）を使用し、瓦の大きさを見極めながら、尚且つ谷筋の傾斜が緩まないよう詳細に配慮し伝統技法の習得に努めた。

4. 外部評価委員会コメント

伝統技術の解明と人材育成の必要性が強調されているが、その先行的取り組みとして特筆できる。

（高良顧問：琉球大学名誉教授）



写真-1 開講式及び共通講義の様子

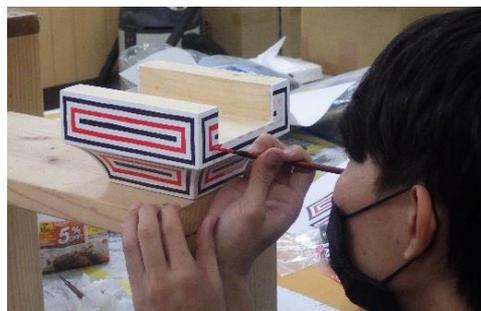


写真-2 建造物彩色実習（上級編）



写真-3 赤瓦伝統製作技術【前期】実習



写真-4 赤瓦漆喰塗実習 製作架台